

自ら学び 心豊かな子どもの育成  
ーピア・サポートの取組を通してー

府中町立府中北小学校  
教諭 山口 真紀

## 1 主題設定の理由

特に高学年の児童に、規範意識が身につけていなくて自己有用感が低い実態がある。そこで、ソーシャルスキル・トレーニングを実施した上で低学年のお世話をするピア・サポートに全校で取り組み、児童の自己有用感を高めると共に、中一ギャップと小一プロブレムの解消につなげようと考えた。

## 2 研究仮説

ソーシャルスキル・トレーニングによりスキルを身につけた上で、低学年のお世話をするピア・サポートに全校で取り組むことは、児童の自己有用感を高め、中一ギャップと小一プロブレムの解消につながるであろう。

## 3 研究内容

- (1) 理論研修
- (2) 授業研究
- (3) データ分析

## 4 検証の指標

- (1) 児童の活動のふりかえりの考察
- (2) 児童アンケートの実施

## 5 達成目標

- (1) 活動のふりかえりにおいて、自己有用感の高まりを認めることができること。
- (2) 児童アンケートにおいて、8割以上の児童が肯定的な評価をすること。

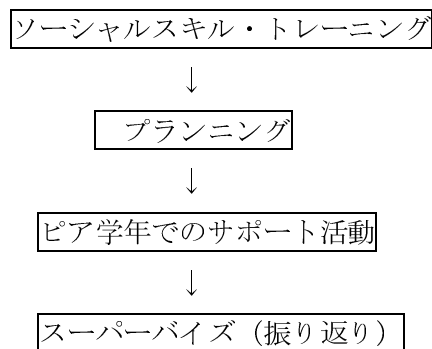
## 6 実践

- (1) ピア・サポートとは

ピア・サポートの実践校の先生を講師に招いたり文献を参考にしたりして、理論研修を行った。

「ピア」とは「仲間」のことであり、「サポート」とは「支援する・思いやる」という意味である。「ピア・サポート」とは、予めソーシャルスキル・トレーニングを実施し、関わる自信を持たせて交流し、自己有用感を得ることで、学校のモデルとなる上級生を育てることに目標をおく取組である。

### 【ピア・サポート プログラム】



#### ① ソーシャルスキル・トレーニング

ピア・サポートの導入として、「人とかかわりたい」という活動への意欲を高め、コミュニケーション能力やリーダーとしてのスキルを学ぶことを目的として行う。

#### ② プランニング

活動内容、役割分担などの活動計画を立て、準備をする。児童が自主的に考え進めていけるように、教師はアドバイスに徹する。

#### ③ サポート活動

ピア学年で交流活動、上級学年が下級学年のお世話をする。

#### ④ スーパーバイズ (振り返り)

サポート活動を振り返り、小さな成果を認め、共有し、次の活動に生かしていく。教師は上級生に対して肯定的な評価を必ず行い、下級生からの感謝の言葉を上級生に伝える。

## (2) ソーシャルスキル・トレーニング

4・5・6年生対象に行う（一部1・2・3年生においても実施）ための職員研修を行った。教師役となる担当者を決め、8つの内容について説明を加えながら模擬授業をした。

1 知り合うために	5 うまく伝えるには
2 協力するために	6 いろいろな聞き方・伝え方
3 気持ちや感情	7 頼むとき・断るときは
4 気持ちを聞き取るには	8 リーダーとしての役割は

4・5・6学年において学級活動の時間を中心として行い、最後に認定証を渡しさらに意欲を高めた。



## (3) 各ピアの取組

組織として全職員で研修を進め、学校全体として成果をあげるために、6年と1年、5年と3年、4年と2年をペア学年として取り組んだ。

各教科、総合的な学習の時間、学活、児童会活動、学校行事などの中で、交流活動を行った。また、毎月1回ピア給食の日を決めて、ピア・サポート学年と一緒に給食を食べ、その後の昼休憩を一緒に楽しく遊んだ。



## 7 研究結果

### (1) 児童の活動のふりかえりの考察 ～人とかかわりを楽しみ、よさを感じている記述～

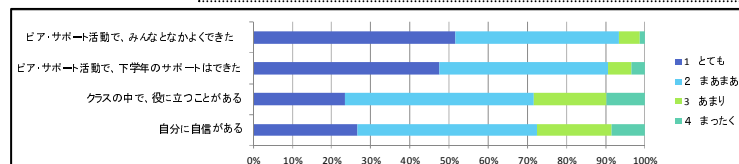
#### (1・2・3年生)

- ・励ましてもらえたから、頑張れた。
- ・楽しませてくれたのですごいなと思った。
- ・また、一緒にやりたいな。
- ・ありがとう。楽しかったよ。
- ・やさしく教えてくれたのでうれしかった。
- ・アドバイスしてもらったので自信がついた。

#### (4・5・6年生)

- ・喜ばせることができてよかった。
- ・助けることができてうれしかった。
- ・〇年生が自分を頼りにしてくれたので自信がついた。
- ・また一緒に活動したいと思った。
- ・次の活動ではもっと工夫していきたい。
- ・〇年生の先生からほめられて照れたけどうれしかった。

### (2) 児童アンケート結果



## 8 研究結果の分析・考察

- ・協同的な学びができ、児童が人とかかわることを楽しむことができるようになった。
- ・上級学年の自己肯定感が高まった。（アンケート「クラスの中で、役に立つことがある」「自分に自信がある」共に、肯定的評価70%以上）
- ・ピア・サポート学年相互の結びつきが強くなった。（アンケート「ピア・サポート活動で、みんなとなかよくできた。」「ピア・サポート活動で、下学年のサポートはできた。」共に、肯定的評価90%以上）
- ・学校教育活動の中での位置づけが十分でなかった。
- ・評価については、教師の主観的な判断に頼るところが大きかった。
- ・カリキュラム・行事・日課などに計画的に位置づけ、学校教育活動のベースとして自己肯定感を高めていくことを継続していきたい。

## 9 成果と課題

(成果)・ピア・サポートを全校で展開したことが、協同的な学びを実現することにつながり、児童が人とかかわることを楽しむようになった。

- ・上級学年は、下学年へのお世話活動を通して達成感を感じ、自己肯定感を高めることができた。
- ・ピア・サポート学年相互の結びつきが強くなった。総合的な学習の時間において伝えたい相手としてピア・サポート学年を意識することも多くなった。

(課題)・今年度は導入の年であり、職員研修と児童の活動が同時進行の状態であり、学校教育活動のなかでの位置づけが整理不十分で、計画的に進められなかった。

- ・評価について、教師の主観的な判断に頼るところが大きかった。自己評価、相互評価の方法や分析の方法を工夫していかなければならない。